茜色の歌姫

第四部　白村江の戦い

春正月の丙申の朔庚申に、御船、還りて娜大津に至る。（中略）五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橘広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を斬り除ひて、此の宮を作る故に、神忿りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大舎人及び諸の近

白村江の戦い想像図

侍、病みて死れる者衆し。（中略）秋七月の甲午の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。

（『日本書紀』巻第二十六）

斉明天皇代　額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

（『万葉集』一巻）

大唐の軍将、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。戊申に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。（中略）須臾之際に、官軍敗績ねぬ。水に赴きて溺れ死ぬ者衆し。

（『日本書紀』巻二十七）

第一章　百済の王子

659

難波。

豊日大王が築いた王都は、日に日に寂れる一方であった。

この地は、水は豊かで、葦の茂る湿地帯であった。そんな葦原に浮かぶ小島に、檜造りの邸が建っている。

飛鳥で重きをなす豪族の一員にふさわしい豪奢な造りの邸に似合わず、訪ねる者は滅多にない。時折、小舟が漕ぎ寄せられ、水や食を運び込み、去っていく。

その邸に、かつて葛城皇子の右腕、豊日大王が難波の長柄宮で大和を統べていた折りに内臣であった中臣鎌子が棲んでいることを、知っている者は希であった。

「どうやら」

邸の庭は、葦原に面していた。しつえられた小さな亭に、いまだ四十も半ばにして、髪の毛はすべて白く、頬はこけて深い皺を刻んだ中臣鎌子は、幾重にも衣を身に巻き付けてくるまり、坐して葦原を見つめていた。

「この度は、鏡郎女の負けであるな」

鎌子の傍らには、安見娘が並んで坐していた。

鏡郎女としては、軍を起こして三韓に出兵し、さらには唐をも破ろうと大望を抱く葛城皇子

を、有馬皇子の謀叛を訴えた功労者として、複び岡本宮に参内させようと謀った。だが宝大王は、葛城皇子を赦さなかった。

「この度、謀叛を未然に防いだのは、葛城皇子が有馬皇子を謀り、盟を結んだかのごとく装いたりし功が大きいと、鏡郎女は大王に訴えた。しかし大王は、何の詔をも出さず、葛城皇子を謀叛の輩として罰しなかっただけでも、ありがたく思え、と言わんばかりの態にて」

喉を鳴らして、安見娘はひめやかに嘲り笑った。鏡郎女の威勢が翳った。あの女、いずれ手を打ってこようが、一度策を弄して敗れた者が、ふたたび策で這い上がるのは難しい。策をうまく運ぶのに、もっとも大事なものは「信」である。鏡郎女や葛城皇子にはそれがなく、額田郎女や大海人皇子にはそれがある。

安見娘は、冷たい笑みを唇の端に浮かべて続けた。

「飛鳥の豪族どもは、策を弄する葛城皇子より、大海人皇子こそ、次の大王に相応しいと、言い合っている」

安見娘は、瞳を動かして中臣鎌子を見た。眼は葦原に据えられ、面差しは毫も動いていない。安見娘は笑って言った。

「汝は、飛鳥の政事を聞くとき、もっとも心が弾むらしいの」

言いつつ、手を延ばし、鎌子の股間をまさぐった。陰嚢を掴み、軽くひねる。鎌子は唇を開け、苦悶とも愉悦ともつかぬため息を漏らした。

六年前。葛城皇子が自ら擁立した豊日大王を高御座から引きずり降ろし、自ら大王になろうと謀った折り、安見娘は、鏡郎女の意を受け、謀の中枢にいた中臣鎌子のふぐりをひとつ砕いた。

ひとつ砕いて、一晩中姦した。

以来、安見娘は、葦原のなかに浮かぶ、人の寄りつかぬこの邸に鎌子を養っている。

今、中臣の家を宰領しているのは、鎌子の従弟の金。中臣金は、蘇我赤兄と手を結び、葛城皇子を奉じて、かつての家の栄を再現しようとあれこれ小策を練っている。

鎌子は、いまや政事の場から遠ざけられ、ひたすら、時折訪れる安見娘と快を貪るのみであった。ひとつ残ったふぐりを、安見娘は砕かぬよう弄び、苦を与える。苦は鎌子の陽物に精を与え、やがて安見娘は、雄々しく勃起したその肉棒に跨り、姦す。

そんな交わりを六年続けるうちに、安見娘は、中臣鎌子の、すぐれて政事を見通す慧さを知った。

安見娘は、鏡郎女の一の配下であった。しかし、鏡郎女は安見娘を、あくまでも使える手駒としか見ていないことは、彼女の意に反して動いても排そうとはしない額田郎女への態度と比べても、明らかだった。

いずれ、鏡郎女とは別の道を歩むべきである。そう考える安見娘は、いつしか、飛鳥で起こるこまごまとした事どもを鎌子に伝え、如何に判断すべきかを問うようになった。そんなとき、中臣鎌子の瞳は輝き、口にする言は重々しさを帯びる。

「吾は如何すべきかの」

安見娘は笑みを閉ざさず問うた。

「葛城皇子と大海人皇子、いずれにつくべきか」

「今は……」

中臣鎌子は口を開いた。
「いずれの皇子にも、つくな」
手を延ばし、安見娘の腹に触れた。鎌子の掌の下、安見娘の躯の裡で、新たな命が息づいていた。
「やがて二人の皇子は相争う。汝が孕んだ吾が子のため、今は、いずれにもつくな」
安見娘は、しばし己が腹を見つめた。子を宿したことが分かって三ヶ月。今年の秋にも生まれよう。
「この子の名を」
安見娘は、鎌子の頬に、己が頬を寄せて囁いた。
「付けてほしい」
ふひと……。鎌子は呟いた。
「ふひと？」
問い返す安見娘に、鎌子は「不比等」と書く、と言った。
並ぶ者なし……。やがて、比肩する者なき実力者として、大和を動かすべき者となせ。
「ふひと……か」
安見娘は、鎌子の頬を両手で挟み、唇に唇を重ね、覆い被さった。

掟は、承知していようの……。
鏡郎女の、強張った面差しが、安見娘の脳裡に浮かんだ。

生まれた子が女ならば、箸墓で育て土蜘蛛となす。男ならば殺す。それが、土蜘蛛の女どもに課せられた掟であった。
父親は誰か、問わぬのか？
そう訊ねると、鏡郎女はかすかに狼狽えた。土蜘蛛が、男とまぐわうことは禁忌ではない。孕んだとしても、あえて父親の名は問わない。しかし、安見娘は、他の土蜘蛛と同じではない。伊予の地で出会った時より、鏡郎女のために数々の功を挙げてきた。
誰か？
すぐさま常の貌に戻り、鏡郎女は問うた。
中臣鎌子。
鎌子？
鏡郎女は、訝しげに首を傾げた。鎌子は、ふぐりを二つながら砕いたはずではなかったか。
一つだけ残しておいた。安見娘は、応えた。さらにつけ加えた。
鎌子は、先を見通せる男。吾等のためにも、役に立とう。
鏡郎女は、わずかに言の端に苛立ちを含ませて応えた。
それは吾が判じること。
安見娘は、鏡郎女を睨み返したくなるのを、必死に堪えた。
かつて……。
亜那が大海人皇子の子を孕んだ時には、彼女が望むままに箸墓から解き放ったではないか。
何故、亜那――額田郎女は掟の外に置き、吾は掟に随わねばならぬ。

鏡郎女は、安見娘の心を読んだように、口を開いた。
額田郎女は、土蜘蛛どもに慕われていた。
故に、掟の外に置いても、土蜘蛛どもは得心した。汝を同じように遇しても、土蜘蛛は得心すまい、と言いたげであった。

「鎌子よ……」
ただ一つ残ったふぐりを握りしめつつ、安見娘は己が陰を中臣鎌子の陽物にあてがい、腰を沈めた。
鎌子は苦しげに呻いた。その苦しみが、彼の陽物を、ますます硬く屹立させた。
「吾等が子は、命を懸けても守り育てる」
募る快に身を委ねつつ、安見娘は、鏡郎女への憎しみを振り払うように、激しく四肢を動かしていた。

春の田に苗が植えられ、青々とした繁りが飛鳥を覆ったころ、まだ夜も明けやらぬうちに、大小の諸豪族が、岡本宮の北西にある小高い丘の麓に集められた。
両槻の丘と呼ばれ、こんもりと樹木に覆われ、人の立ち入ることもないその丘は、狂心の渠を覆う柵の裡にあった。
その夜、集められた豪族どもは、松明を携えた土蜘蛛の女兵二名に導かれ、こわごわと開けられた柵の門をくぐった。門をくぐると、水の流れる音がした。ひとびとは、これがかの渠か、と

水音に眼を向けた。松明のあかりに照らし出された渠は、幅は二歩（約3・60メートル）。その辺は、すべて平らに石を敷き詰められている。やや歩くと、渠から幅一歩（約1・8メートル）の小さな渠が枝分かれしていた。松明を持った土蜘蛛は、その小渠にそって歩く向きを変え、その行く手に、両槻の丘がくろぐろと静まり返っていた。
なにやら形が変わったような……。かつて、両槻の丘を眺めつつ、朝議の度に岡本宮――その折は板蓋宮と呼ばれていた――に参内していた豪族は、首をかしげ、しかし口には出さず、ひたすら歩いた。
やがて丘の麓に着いた人々は、驚きざわめいた。
丘は、樹を切り払われ、すべて石段に覆い尽くされていた。石段から丘の頂に、小渠は続き、滝のように水が流れ落ちていた。この丘に井戸はなかったはずだが……。ひとびとは、訝しがりつつも、きれいに磨かれた花崗岩の石段を踏んで登った。
登り終えた頃、すでに闇は青く変じ、東の空が茜色に染まっていた。石段を登り終えた人々は、感嘆の叫びをあげた。
そこは、一町（約100メートル）四方の、花崗岩を敷き詰めた広場であった。北に、亀が地に伏せた形の、人が手足を広げたよりも一回り大きい石の桶が置かれていた。甲羅の部分が掘りくぼみ、水が湛えられていた。その傍らに、塔の形をした石組みの井戸があり、汲み上げられた水は、亀の甲羅に溜められ、口の部分から石樋を通り、中央に添えられた、東西に三歩（約5・4メートル）、南北に二歩（約2・3メートル）、高さ三尺（約1メートル）の、舟形の石に流れていく。舟形の石には、八箇所の窪みが穿たれ、それぞれを小さな渠が繋いである。水は舟形の石を循環

し、やがて丘を下り、麓の大渠へと注ぎ込む。

夜がしらみ、ひとびとは、両槻の丘に築かれた石造の庭の意味を悟った。亀は、飛鳥の大地を司る土産の霊。土産の霊が地中深くから汲み上げた水は、丘を下り、宝大王が穿った渠を経て、西は難波へ、東は伊勢へと貫く飛鳥川へと注ぎ込む。いわば、土産の霊の恵みが、大王によって地上に呼び出され、飛鳥を隅々まで潤すのだ。

東の空に太陽が貌を出した。人々が眩しい光を仰ぎ見れば、そこに三つの人影が立っていた。

宝大王……。

老いた一豪族が、その名を呟き、ひとびとは一斉に拝跪した。

宝大王は、白い巫女装束に身を包み、髪を黒く染め、舟形の石に歩み寄り、水に手を浸した。その左右に、同じ巫女装束の、額田郎女と鏡郎女が並ぶ。

大王は、そのしわがれて、油の失せた掌に、水を掬った。

「手研よ、ここへ来よ」

貌をあげた先に、八十に近い翁がうずくまっていた。古えより大王家に仕えた豪族ながら、誰もその氏名を知らぬ。翁は、大王に手招かれ、しばし総身を強ばらせていた。やがて、四囲の眼差しがこちらに集まっているのに気づき、大王の御前によろばい出、その足元にひれ伏した。

大王は、掌の水を、翁の小さな背にふりかけ、さらにまた、掌に水を掬い、貌をあげよ、と声をかけ、そのひびわれた唇に近づけた。

翁は、幾たびも促され、その掌に唇を当て、水を吸った。

ひとびとがどよめいた。

集まっていたのは、かつて廟堂に名を連ねた大官ばかりではない。大王家のために尽くしてきたという伝えだけを誇りに、貧しい日々を送っている小豪族が、その半ばを占めていた。そのなかでも、とくに貧しく、人々から忘れられていた翁に、大王自ら水を賜ったことに、彼等は心を打たれた。

飛鳥の水は、遍く飛鳥の人を潤す。

ひとびとの多くは、そのように、宝大王の行為を受け取った。

しだいに日が昇り、闇が明けゆくなか、ひとびとは笑いさざめきつつ、丘の上から流れ落ちる水に添って、麓へと降りていった。

丘を降りると、渠の岸に舟が並んでいた。出迎えた奴どもに随い、ひとびとは分かれて舟に乗った。漕ぎ手は櫂を動かし、その進む先は、岡本宮の前に造られた苑池であった。

東西に七十歩（約60メートル）、南北に二町（約２００メートル）、長方形の巨大な苑池には、渠から流れ込む水が満々と湛えられてさざ波をつくり、幅が十五町（約13メートル）の円形の平らな島が浮かんでいる。

宝大王の舟は、池のなかの島に漕ぎつけられた。平らに石を敷き詰めた島には、中央に天蓋つきの絹布を貼った椅子が四つ、並べて置かれていた。舟を降り立った宝大王は、すでに紫の衣に金色の冠を

飛鳥京苑池再現図

つけて盛装し、椅子に坐した。両端の椅子に、葛城皇子と大海人皇子が侍る。大王の背後には、鏡郎女が影のように寄り添っていた。

池の辺に、序列に随って居並び、椅子を与えられた豪族どもは、島に据えられた四つの椅子の、宝大王の右にひとつだけ空いているのに、眼を向けた。やがてそこに座る者の名を知っているのは、蘇我や中臣、巨勢といった、限られた大官ばかりであった。

ふと、楽の音が響いた。見れば、西へと伸びる渠の上を、華やかな天蓋に覆われた舟が漕ぎ寄せてくる。

天蓋の紋様に、小豪族のひとりが、「百済」と呟いた。やがてひとびとは、舟の中央に坐した人物に眼を向けた。年の頃は四十近く、色白く、精悍な美丈夫であった。

「人々よ」

いつしか、池に筏が浮かべられていた。笠をかぶり、身を粗末な布で覆った舟人が筏を漕ぐほか、鮮やかな紅の衣に、とりどりの仮面をつけた乙女が乗っていた。

乙女たちが立ち上がり、声を揃えて叫んだ。

「豊璋王子、百済より参らせ奉る」

ひとびとがどよめいた。かつて、百済はおろか三韓から、王家の血を引く貴公子が、大和を訪れた試しはない。

豊璋王子は、島に降り立ち、宝大王に向かい、三度、地に額をつけて拝礼した。大王はうなずき、自ら手をとって、右隣の椅子に招じ入れる。王子が座すや、楽の音は高らかに響き、筏の上

の乙女どもが踊り始めた。

王子は、笑みを浮かべ、水上に浮かぶ筏の上を、みごとな足さばきで揺らすことなく舞う乙女たちを見つめていた。舞を終えた乙女どもが拝礼すると、歓声をあげて手を叩いた。

乙女たちが仮面を脱いだ。中央にいたのは、十市皇女。愛らしく微笑み、再び拝礼した。

すると、筏を漕いでいた舟人が、身を覆う衣を脱いだ。

現れたのは額田郎女であった。

朗々と詠じられる寿歌を、いつしか筏に近く漕ぎ寄せた舟に乗った百済人が、百済の言葉に変えて歌う。

豊璋王子は立ち上がり、再び宝大王に向かって拝礼した。

王子が背を伸ばし、貌を上げたとき、大王の背後に控える鏡郎女が、あたかも王子と眼差しが交差したかのように、かすかに瞳を動かし、唇がわずかに開くのを、額田郎女は見逃さなかった。

周、秦、漢、魏蜀呉の三国、晋、隋、そして唐。

王朝が興っては滅び、滅びては興り、数千年、それを繰り返してきた大地から海に突き出した半島は、三韓と呼ばれ、北には唐と接する高句麗、その南西に百済、百済の東隣が新羅、その三国が互いに覇を争っていた。

かつて、三韓でもっとも勢い盛んであった高句麗は、唐の度重なる侵攻に衰微していた。唐は、高句麗の息の根を止めるべく、新羅と盟を結んだ。軍兵や将、兵器を供給し、南北から挟み撃ちし、今や高句麗の滅びは間近に迫っていた。

新羅はさらに、西の百済をも、唐の力を借りて併呑しようとたくらみ、たびたび兵を送って国境の邑々を侵していた。

百済は、高句麗の命運が尽き、やがて唐・新羅の矛先が自らに向けられることを恐れ、海を越えた大和に助力を求めている。豊璋王子が大和を訪れたのは、来るべき新羅との軍が近いためであろう、と飛鳥の豪族どもは囁きあった。

苑池での儀式が終わり、太極殿の前庭を開け放って、宴となった。宴には、渠の興事のために招かれた百済人も招かれていた。飛鳥の豪族どもは、改めてその数の多さに驚いた。さらに、豊璋王子とともに訪れた百済の将軍も含め、そこかしこに飛び交う百済の言葉に、あたかも大王宮が百済人によって占拠されたかのようにも見えた。

そのなかにあって、豊璋王子は宝大王と並び、常に笑みを絶やさなかった。一方で、鬼室福信と呼ばれる髭面の将軍は、黙したまま、ひたすら酒盃を口に運んでいた。

苑池の南に程近く、川原宮があった。かつて、板蓋宮を焼き払い、新たに岡本宮を建てる間、宝大王の仮住まいとして建てられた宮が、豊璋王子一行の宿とされた。

豊璋王子とその随臣が宴より還るのを待つ百済人どもが忙しく立ち働くなか、額田郎女は、王子の寝屋の天井の梁に、身を横たえていた。

十年前、蘇我石川麻呂を誅するため、山田寺の庫裏に潜んで以来……、ふと額田郎女は、あのとき、自害した美濃津子から讃良を預かったことを思い出した。

みじろぎもせず、しかし四肢を緩やかに保って気配を消す。土蜘蛛であった折に受けた厳しい

鍛錬で身に着けた技は、いまだに忘れてはいない。

三韓より大和に来たったらしい鏡郎女と、百済の王子との間に、如何なるつながりがあるのか。儀式の最中に交わされたように見えた目配せは、何を意味するのか。

自ら調べるしかない。夜止や呉葉のように、鏡郎女との戦いに、他の者を巻き込んで命を落とさせるわけにはいかない。額田郎女は、そう心に定めていた。

扉が開き、豊璋王子が、幾人かの百済人と言葉を交わしつつ入ってきた。やがて余の者は去り、王子は独り、褥に入るでもなく、薄暗い灯火を見つめ、端座していた。

しばし待つうちに、扉がかすかに叩かれた。豊璋王子が、短く応える。音もなく開いた扉から現れたのは、まさしく鏡郎女であった。

「ヨ・フイ」

豊璋王子は、笑みを浮かべ、懐かしげに鏡郎女に呼びかけた。鏡郎女は、じっと王子を見つめ、やがて口を開いた。

「ブンジャン・ワンジャ」

ヨ・フイが「麗姫」であり、ブンジャン・ワンジャが「豊璋王子」であることを、額田郎女は知らない。滑らかな百済の言葉でかわされた二人の長い語りを、額田郎女が理解できていれば、大和のその後は随分と変わったかもしれない。

額田郎女は百済の言葉を解さず、ただ、豊璋王子が親しげに鏡郎女の手を取り、傍らに座らせたことに、鏡郎女が三韓の出であるという夜止の推察が正しかったことを確信した。

――二十年ぶりだな、麗姫（ヨフイ）。
――王子（ワンジャ）……、会いたかった。
――私もだよ、麗姫。あなたのことを忘れた日は、一日もない。
――あなただけ……私が三韓で出会った男のなかで、もう一度会いたいと願っていた人は。
――麗姫が、大和の大王に仕え、この国を動かす立場にあると聞いたときは、正直、驚いた。いまや百済でも、女性が政治を動かすことはおろか、官職に就くことすら許されないのだからね。
――新羅のように？
――新羅は、唐の儒教と制度を取り入れて強盛になった。新羅に対抗するために、われわれも唐の制度に倣おうという声を抑えられなかったのだ。儒教に従えば、女性は政治に参画することはできない。
――そう……。
――それにしても、奇跡のようだ。あの麗姫が、いまや大和の大王随一の側近、大臣といえども、麗姫には頭が上がらないのだから。
――あの頃……。

鏡郎女は、宙空を見つめた。まぶたを閉じ、身の裡の痛みを堪えるような面差しを浮べた。

――あなただけだった。私を庇（かば）い、慈（いつく）しんでくれたのは。

――私は、君を守れなかった。
――いいえ、私を理解し、いとおしんでくれたのは、百済の王宮のなかで、あなただけ。
――私は、まだ若く、無力だった。
――私は、こうやって命永らえている。あなたのおかげよ。
――だが、君の母を……。
――知っているわ。私が、あなたの手引きで海に逃げた後、母は新羅に引き渡され、首を刎（は）ねられた。
――……。
――母だけじゃない。父も、兄も、姉も、弟も妹も、一族をすべて逆臣として殺した新羅を、絶対に許しはしない。
――その恨みゆえに、君は百済に救援軍を送るよう、大王を説得したのか？
――それもあるわ。でも、それだけじゃない……。

苦しげに胸の恨みを吐き出していた鏡郎女は、不意に笑みを浮かべ、豊璋王子の手をとった。

――大和に来て以来、私は様々に手を打ってきた。かつて、大和の民は、諸豪族が支配し、大王といえども、豪族たちの了解なしに兵を動かすことはできなかったの。でも今や、大和の民はすべて大王のもの。大王の命によって万を越える兵を動員することも不可能じゃなくなった。しかもこの五年、兵たちは訓練を重ねてきた。百済語を話せる兵も少なくないわ。

――……。
――わかる？　百済と大和が手を携えれば、新羅はおろか、高句麗をも征服し、唐と対決できるだけの軍事力を、私たちは掌中にしたのよ。
――私たち？
――そう、私とあなた。
――……。
――宝大王は、もう老い先長くはない。あなたの父、義慈王（ウイジヤウン）と同様にね。
――……驚いたな。私に、兄たちを差し置いて、百済の王になれというのか？
――三韓の王に。
――そして君は、大和の女王になると？
――私自身が王になる必要はないわ。私の意のままに動く大王家の皇子でも、かまわない。ただ、私は、あなたと二人、理想の世界をこの世に築きたいと願っているだけ。
――どんな世界を？
――私のような思いを味わう者がいなくなる世界を。
――……。
――あなたは知っているわね。私は、新羅の王族のなかでも、特に武勇に優れた父のもとで育った。その頃、新羅を治めていた善徳女王（ソンドンニョワ）は、私を花郎（ファラン）の一員になることを、許してくださった。
――花郎……。新羅王家の親衛隊だね。
――そう、見目麗（みめうるわ）しい若い男だけで組織され、戦場では最前線で働き、その勇猛と忠誠で、新

羅の花と讃えられた、あの花郎。私は、武芸においても、忠誠心においても、他の花郎に劣ることはなかった。私に剣で勝てる者は誰もいなかった。花郎たちが、私を妬（ねた）み、嫌っていることは知っていた。でも、善徳女王のため、いつか、あの方の盾となって戦う日のため、私は日夜、鍛錬を怠らなかった。
　ところが、女王が崩御され、あの忌々しい金春秋（キムチュンチュ）が王位に即（つ）き、唐に倣って官職から女を排除するようになった……。
――武烈王（ムヨラン）か。
――そう。花郎から去れという王の命令を拒否した私を、花郎たちは、寝込みを襲い強姦しようとした。
――……そうだったな。
――私は三人を殺した。
――もう、言わなくてもいい。
――五人を去勢した。
――言うな、麗姫。
――正当防衛だった……。
――そのとおりだ。もうよせ、麗姫。
――でも、王は、私を反逆者として花郎どもを差し向け、一族すべてを捕らえた。
――麗姫……。
――生まれたばかりの妹まで殺したのよ、あいつらは！

床にうつ伏せに肩を震わせる鏡郎女に、梁の上の額田郎女は、意味は分からずとも、痛ましさを覚えた。鏡郎女もまた、三韓の地で、忘れがたい心の傷を背負わされたことだけは、察せられたからだ。

噴き出す思いを押さえつけるかのように、鏡郎女は、しばし苦しげに嗚咽し、やがて貌をあげ、豊璋王子を見つめた。

――私と母だけは、やっと百済まで逃げ延びた。

――……。

――あなたの父、義慈王が、母を新羅に引き渡したことを、私は恨んではいない。母を引き渡さなければ、新羅は大軍を送って百済に攻め込んでいたはず。そしてあなたは、私だけでも、逃がしてくれた。

――私一人の力じゃない。

――何人かの女官が協力してくれたわね。でも、百済の王族も大官も、私たちを新羅に引き渡すことで、何らかの見返りを得ることばかり考えていた。そのなかで、あなたは私を逃がしてくれた。

――……。

――だから私は、あなただけは信じている。

豊璋王子はしばし黙し、やがて口を開いた。

――麗姫よ。いや、いまは鏡郎女（キョンナンニョ）……。

――ヨ・フイと呼んで。かつてのように。

――君の恨みはよく分かる。しかし、それ以上に、三韓が合い争う状態を解決せねば、戦いは絶え間なく起こり、民は苦しむばかりだろう。

――そのとおりよ。

――私は君に賭けよう。

――本当に？

――大和の軍は、いつ、百済に派遣されるのだ？

――もう少し待って。

――もう少しとは？

――少なくとも、あと半年。

――半年だと？　百済は、今や危機にある。国境には新羅が大軍を送り、唐では水軍を組織し、いつ、海を越えて百済に到るかもしれない状況なんだぞ。

――焦らないで。いま、大和の軍を百済に送っても、得られる利益は少ないわ。

――どういうことだ？

――あなたが、百済の大王家で疎（うと）まれていることは、私も知っている。

――……。

――気を悪くしないで聞いて。あなたが疎まれているのは、あなたが、あなたの兄たちより優

れた武人であり、才に恵まれ、人望もあるのを妬まれているからよ。そんなあなたが、大和の大軍を率いて戻ったとしても、ただ父王の命に従っただけ。そういうふうに扱われることは眼に見えている。

――……。

――でももし、新羅軍が百済に侵入し、存亡の危機に陥ったとき、あなたが万を越える大和の精鋭軍を率いて還ったとしたら？　あなたは、百済人から英雄として迎えられるわ。

――……。

――それまで待って。いま、阿倍比羅夫（あべのひらぶ）が、大軍を率いて蝦夷（えぞ）地に派遣されている。彼らこそが、大和で最強の軍よ。あと半年で飛鳥に戻ってくる。それまで、病気でもなんでもいい、理由を作って、この地に留まってほしいの。

――恐ろしい女になったな、麗姫。

――……答えは？

――恐ろしくも、頼もしい。

――……。

――さっきも言っただろう？　私は君に賭ける。

――……嬉しい。

――私はしばらく、この地に滞在しよう。ひとつ、聞いておきたい。今日の儀式で、宝大王の側に二人の皇子が侍っていたな。

――左にいた、髭をはやしていたのが葛城皇子（カルソンフアンジヤ）。宝大王のただ一人の皇子よ。

――どういう男だ？

――彼は、今のところ、私と同盟関係にあるわ。三韓出兵にも積極的よ。でも、傲慢な野心家。人望はない。

――もう一人は？

――大海人皇子（テヘイナンジヤ）。

その名を口にしたとき、鏡郎女の唇が自然とほころんだのを、豊璋王は見逃さなかった。

――宝大王の子ではなく、その夫、亡き田村大王が伊勢という地の女に産ませた庶子。

――君はどうやら、葛城皇子より、大海人皇子に、より好意を抱いているようだな。

――彼は、あなたに似ている。百済の王宮で出会った当時のあなたに。

――今は違うと？

――少なくとも、今のあなたは頼もしい。行動をともにするにたる相手よ。大海人皇子は、心根の優しさは、あなたと同じ。でも、それだけ。

――……。

――彼は、出兵には賛同しないでしょうね。

――なぜ？

――血なまぐさいことが、嫌いだから。

――君はさっき、宝大王亡き後には、大王家の皇子に大王位を継がせてもいいと言った。その

皇子とは、葛城皇子のことか。
――出兵だけを考えれば、そうでしょうね。でも……。
――でも？
――いずれかを選べと言われたら、大海人皇子。
――矛盾しているな。
――そのとおりね……。ねえ、豊璋王子。もし大和軍が出兵し、新羅や唐と戦えば、二十年前の私と同じく、家族を失い、家を失い、心に傷を背負う子が、大勢生まれるわ。でも、血を流すことを躊躇（ためら）っていたら、私の理想とする世界は築けない。
――……。
――私が、三韓の大地に、さらには中華の大地に、おびただしい血を流した後、大海人皇子のきれいな手で、私の理想をなしとげてほしい。そんなふうに願っているのかもしれない。
――血を流すのはたやすい。その後で新しい世界を作り上げるのは、困難だ。
――困難ではあっても、不可能ではないかもしれない。あなたが、彼等と手を結べば。
――彼等？
――大海人皇子と、額田郎女（エクチヨルランニヨ）。
――誰だ、それは？
――かつて私の配下の土蜘蛛で、後に大海人皇子の妻となって娘を産み、今は大王家に仕える歌人。今日の儀式で、あなたに寿歌（ほぎうた）を捧げた女。
――なるほど。

――彼女は、ただの歌人じゃないわ。様々な策を大王に提案し、受け入れられ、その結果、大和は豊かになった。
――その額田郎女と語り合いたいな。どうすれば、国を富ませ、民の暮らしを豊かにできるのか。
――そうね……でも、今、彼女は私を敵視している……。
――なぜ？
――出兵によって、せっかく大和の民が積み上げた豊かさを、失うことになると思っているから。
――わからないな……なぜ君は、その思いを彼らが理解するよう、努めないんだ？
鏡郎女は立ち上がった。硬く強ばった面差しで、豊璋王子を見下ろした。動かぬ瞳は、眼差しの先にある王子ではなく、自らの心に向けられていた。
――また、会いにくる。そのときに話すわ。ひとことでは言えないことだから。
――帰るのか？
豊璋王子は立ち上がった。切なげな眼で、郎女の肩に手を置いた。
――だめ。

――……。
――私も、あなたに抱かれたい。でも、抱かれたくない。
――そういうつもりでは……。
――嘘。

鏡郎女は、唇に笑みを浮かべ、眼差しは、今にも涙がこぼれそうに潤んでいた。

――私はあなたが好き。誰よりも好き。誰よりもあなたに抱かれたい。だからこそ、事を成し終えるまでは、あなたに抱かれたくないの。
――……。
――わかって。

額田郎女は、微動だにせず、梁の上で耳をそばだてていた。
鏡郎女は、彼女が知っている鏡郎女ではなかった。声を振り絞って辛い思い出を、愛おしい相手への思いを、心の赴くままに吐露していた。
やがて鏡郎女が去り、豊璋王子が再び床に端座し、もの思いにふける間、額田郎女はひたすら、気配を消すことに念を専らにしていた。
鏡郎女が豊璋王子に抱く思いの深さは感ぜられた。だが、語られた内容までは理解できていない。鏡郎女が額田郎女や大海人皇子に抱く、複雑に捻じ曲がった思いを知ることはできなかった。

鏡郎女の本意を知らぬまま、額田郎女は、次に打つべき手を、躯の隅々の気を悟られないように消しつつ、思いをめぐらしていた。

それからしばらく、飛鳥は平穏であった。
柵を取り払われ、ひとびとの眼にも解き放たれた、新たなる水の都に、東国の蝦夷が朝貢に訪れ、その度に催される儀式や宴に賑わった。
阿倍比羅夫の率いる水軍は次々と蝦夷を服属せしめていた。秋田、渟代、津軽、渟足、都岐沙羅、胆振といった耳にしたことのない地の名が、飛鳥の人々の口に上るようになった。珍しい習俗をまとって訪なう蝦夷の使節を一目見ようとする人垣が、渠に浮べられた舟で運ばれる異人を見守った。
岡本宮に参内した蝦夷は、宝大王の御前に拝跪し、貢物を献じ、土地の舞を披露する。大王は彼らに、額田郎女を通じて、寿歌を賜う。華やかさこそ違え、百済の豊璋王子が受けた饗応に、どこか似ていた。
秋になると、阿倍比羅夫が二百の船団とともに難波の津に帰還した。人々は歓呼の声で凱旋軍を向かえ、さっそく宴が開かれた。阿倍比羅夫の周りに、鬼室福信ら百済の将軍たちが集い、しばし語らいあっていた。
秋の田の刈り入れが終わる頃、諸豪族のもとに、大王の詔が届けられた。十日の後に朝議を開く故に岡本宮に参集せよとの命であった。
宝大王が、豊日大王を追って以来、六年ぶりの朝議である。

その場で、三韓への出兵が諮られる。ひとびとはそう噂しあった。

「人は欲で動く」

大王の詔が発せられた夜、難波の宮の奥深く、人を遠ざけ、訪れた鏡郎女と向かい合った葛城皇子は、こわく茂った髭を撫でつつ嘯いた。

「蘇我をはじめ、百済の鉄を欲している豪族は多い。百済を救った後、鉄で得られる利を彼らに与えれば、たやすく出兵に賛意しよう」

「ならば好し」

鏡郎女は微笑んだ。

「汝が欲した大業……三韓をも唐をも随え、四海に大和の武威を輝かしめる、その願いは、まさに叶いつつある」

「しかし」

葛城皇子は眼を逸らし、呟くように言った。

「そう、思うままに事が運ぶのか」

皮肉げに唇を歪める葛城皇子に、鏡郎女は眉を顰めた。葛城皇子は続けた。豪族の意など、利で誘えばどうにでもなる。恐るべきは、利では動かぬ者。

「大海人皇子と額田郎女……」

葛城皇子は背を伸ばし、眼差しを鏡郎女に向けた。

「かの二人は如何」

「二人には、吾が手の者が、眼を離さずにいる」

とくに動きもない。そう静かに言い放ちつつ、鏡郎女の貌のかすかな強張りを、葛城皇子は見逃さなかった。

「汝がそう言うならば、間違いはあるまい」

それにしても……。葛城皇子は、唇の端を歪めて笑い、向かい合って端座する鏡郎女を見やった。

「岡本宮の門を硬く閉ざし、柵で囲って豪族どもを締め出した汝が、朝議を開くべしと、宝大王に献策するとはな」

面差しは穏やかに、しかし胸の裡で鏡郎女は歯噛みした。

有馬皇子の一件で明らかになったのは、宝大王の信が、より額田郎女に向けられていることであった。謀叛発覚を機に、葛城皇子を政事に復せしめ、三韓出兵を推し進めるという策は、額田郎女によって阻まれた。

宝大王は、自らの意を滅多に口にしない。眼の前で己が子に寵臣を殺され故か、人を信じず、人に己を委ねず、ただ、献じられた策のいずれを選ぶかを口にすることのみであった。

果たして、宝大王に三韓出兵の意がありや否や、明らかでない。それゆえ、鏡郎女は出兵を大王に諾せしめるため、諸豪族の後押しを欲した。かつての鏡郎女ならば、葛城皇子や豪族の助けなど求めようともしなかったであろう。

「三韓出兵は」

鏡郎女は静かに言った。

「四海を遍く、吾等が手にすることぞ」
当時の大和人にとって、唐と三韓と大和は、世界のすべてであった。
「必ずやり遂げねばならぬ。故に、豪族どもの賛意が要る」
「吾等が手に、か」
呟くように、葛城皇子は反芻した。

十日後の朝。
岡本宮、太極殿の前庭の玉砂利は、参集した百を超える大官に埋め尽くされていた。
太極殿の階梯を昇ったところに椅子が置かれ、金色の冠に紫の衣の宝大王が座し、その左右を鏡郎女と額田郎女が侍った。
やや離れて、豊璋王子にも椅子が与えられている。その姿にひとびとは、やはり三韓出兵が諮られるのだな、と得心した。
大王の前に額ずく百官に混じって、葛城皇子の姿があった。そのことが、群れの端に連なる小豪族どもを訝らしめた。
何故に、大海人皇子は、ここにいまさぬ。
百済の王子や、かつて大王に背き、宮への参内を赦されなかった葛城皇子が招かれて、大海人皇子が招かれておらぬは何故ぞ。
蘇我赤兄や中臣金をはじめとする大官どもは、互いにそっと目配せしつつ、疑念をわだかまらせた。

大海人皇子を慕う者の数は、日に日に増えているときく。大海人皇子が三韓出兵に同意した故に、朝議を開いたものと思うていたが……。
三韓出兵には、万を越す兵を動かさねばならぬ。吾等大官が差し出す兵のみでは間にあうまい。大海人皇子の同意が得られていないのであれば、小豪族どもが如何に抗うかしれたものではない。足りぬ分を、吾等に押し付けられたのでは、とても引き合わぬ……。
大王の傍らに侍する鏡郎女は、そっと額田郎女に眼をやった。
大海人皇子は、来ると言うたはず。何故に姿を見せぬ……。
大官どもがこぞって、鉄の利ほしさに三韓出兵に賛意を表すれば、大海人皇子も表立って否とは言えまい。大海人皇子を慕う小豪族どもに、出兵を拒まぬ皇子の姿を見せることも、朝議を開いた目的であった。
額田郎女と大海人皇子には、常よりも人数を割いて、土蜘蛛どもに見張らせてきた。二人が会って談合した形跡はない。人を派して気脈を通じ合った気配もない。策を講じているはずはないが……。
焦燥する鏡郎女をよそに、楽人の鳴らす銅鑼とともに朝議は始まった。
「大官たちよ」
額田郎女が口を開いた。
「明神と御宇大和の大王の詔されて曰く……」
額田郎女が詔を読み上げる間、宝大王は眉ひとつ動かさず、眼差しを天に向けていた。
詔は、凱旋した阿倍比羅夫を褒め称え、さらに、百済の窮状が告げられた。この二つを結び合

わせば、自ずと、阿部が東への長征で鍛え上げた水軍を、三韓に差し向け、百済を救うべきとの議が導かれるはずであった。

詔を読み終えた額田郎女は、口を噤(つぐ)んで眼を伏せた。鏡郎女が草し、大王の閲(えつ)を得て決したとおりに読まれた。後は、蘇我赤兄が三韓出兵の策を献ずる手はずになっている。鏡郎女は、そっと赤兄に眼をやった。

赤兄は、眠たげなまぶたを動かし、口を開くべく背筋を伸ばした。

そのとき。

銅鑼が鳴り響いた。

「大海人皇子である」

門のあたりに侍っていた舎人が、大きく叫んだ。百官の眼は、軋(きし)んだ音をたてて開く門扉に注がれた。

大海人皇子が、三人の蝦夷を随えて立っていた。

「遅参(ちさん)の非礼を赦(ゆる)したまえ。大王の御前にて、是非とも議せられたき件あり」

玉砂利を踏み鳴らしつつ、左右に分かれた百官の間を大股に通り抜け、大王の御前に拝跪した大海人皇子に、鏡郎女は傍らの額田郎女を見やった。静かに眼を伏せ、毫(ごう)も面差しを変えぬ額田郎女に、鏡郎女は身の裡(うち)より湧き上がる震えを抑えかねた。

土蜘蛛どもは、何を見張っていた。

やはり策を練っていたのだ……。

葛城皇子が、鋭い眼差しを大海人皇子に向け、それからゆっくりと貌を動かし、鏡郎女を見た。口を開こうとした赤兄は、小声で傍らの中臣金に問いかけ、金は短く首を振った。

大海人皇子は続けた。

「この蝦夷どもは津軽(つがる)を宰領する者。聞けば、津軽より海を隔てた北の渡島(おしま)に粛慎(みしはせ)なる異人あり。語は通じず、性は暴戻(ぼうれい)にして、しばし海を渡って津軽に漕ぎ寄せ、邑々(むらむら)を荒らす。なにとぞ、大王の御稜威(みいつ)を以て粛慎を鎮めたまえと願ってあり」

三人の蝦夷が、地に額をつけて平伏した。

百官は静まり返った。

大海人皇子は、この度の朝議が、三韓出兵を諮ることとは知らぬのか？　あるいは、知っていて、あえて再度の東征を献策するのか？　しかも、救援を求めている百済の皇子を前にして。とすれば、その意とするところは何か。

「大海人皇子よ」

宝大王が口を開いた。

「粛慎どもを鎮めるに、いかほどの兵が要るぞ」

「粛慎が津軽に襲い来るときは、少なくとも三十、多くは百の舟を連ねることもあると」

「ならば、百五十の舟で足りるか」

大官どもは息を呑んだ。百五十といえば、さきに阿倍比羅夫が蝦夷を服属せしめるために編んだ水軍とほぼ同数。その数を、大王自ら口にした。

大王は、阿倍比羅夫を見やった。齢四十五。朴訥だが誠実な人となりで知られる将軍(いくさのきみ)は、軽

く頷き拝跪した。大王の詔とあらば、何時なりとも出兵する。比羅夫の面差しがそう語っていた。
「大官(まえつぎみ)よ」
ひときわ高い声で、宝大王は問うた。
「汝等が意を陳(の)べよ」
大官どもは貌を見合わせ、さらに眼差しを、静かに俯(うつむ)く豊璋王子に注いだ。
豊璋王子は、ゆっくりと貌を上げ、まず大海人皇子を見た。前庭の玉砂利に額をすりつける蝦夷どもの肩を、軽く叩いて励ます大海人皇子に、豊璋王子は軽く微笑み、鏡郎女を見た。硬く面差しを強張らせ、瞬きひとつしない鏡郎女から眼を離し、静かに立ち上がった。
「将軍阿倍比羅夫(チャングンアブビラブ)」
阿倍比羅夫を見つめつつ、豊璋王子の口から発せられた言葉を、訳語(をさ)と呼ばれる大和言葉を話せる百済の官人が言い換えるよりも早く、鏡郎女は、その頬をかすかに引き攣(つ)らせた。
「もし、大王が将軍を再び蝦夷の地へ遣わされるならば、吾もともに征きたい」
ひとびとはどよめいた。他ならぬ百済王子が、蝦夷への出兵を認めたのだ。
さらに豊璋王子から発せられた言葉に、鏡郎女は胸の高鳴りを抑えられず、鼻孔からもれる息が荒げになった。
「さらに額田郎女をも随(つ)れ征(ゆ)かれよ」
驚いて貌をあげた額田郎女は、咄嗟に大海人皇子を見やろうとして、留まった。鏡郎女の鋭い眼差しが、半ば向けられていたからである。
豊璋王子は続けた。

「額田郎女の歌舞こそ、飛鳥の華。歌舞を以て蝦夷の人々を、否、粛慎(みしはせ)をも、大王の徳に感化せしめるべし」
百済人の訳語の声のみが、広い前庭に響き渡った。
静寂を破るように、宝大王は立ち上がり、声を張り上げた。
「王子が献策、吾は諾する。大官の意は如何に」
還ってきたのは、沈黙のみであった。
「されば」
大王は再び、椅子に腰を沈めた。
「阿倍比羅夫よ、年が明ければ、すぐにも津軽へ征(ゆ)け」

その夜。
河辺宮(かわらのみや)では、津軽の蝦夷どものために宴を開きつつ、大海人皇子は訝しげに胸の裡で呟いていた。
何故、豊璋王子は、すぐに吾が献策に賛意を表したのだろう。
さらに、額田郎女を伴うとは、何故か。
夜がさらに更ければ、額田郎女から何らかの報せがあるだろう。それを待つしかない。何度も頭を下げ、ひたすら謝意を表する蝦夷に微笑を作りつつ、大海人皇子は思った。

――信じられない。

――落ち着け。
――落ち着いていられるわけないでしょう！　粛慎（みしはせ）を鎮めるのに、半年か一年か……、その間は、三韓出兵なんかできっこない。百済の危機はすぐそこに迫っていると言ったのは、あなたよ。平気なの？
――君は、新羅軍が百済に侵入するまでは出兵は控えるべきだと言ったじゃないか。
――ええ、言ったわ。でも、新羅軍の侵攻は、明日かもしれない。明日ならばまだいいわ。新羅は、大和に間諜を忍ばせているはず。阿倍比羅夫の水軍が津軽に向けて発った後に、百済に攻め込むかもしれないのよ。その時、この飛鳥に水軍を置いておかねば、迅速に救援に赴くことは無理。
――……。
――唐の援軍を得た新羅が百済を制圧してから、比羅夫の水軍を蝦夷から呼び戻したのでは、手遅れということよ。わからないの？
――そうなったとしても、手遅れではない。
――なんですって？
――新羅が百済を占領すれば、わが百済王家の者はみな、唐が新羅に連行される。そこに私が大和軍とともに乗り込み、占領軍を追い払えば、百済は私のものになる。
――まさか……大和軍だけで、新羅と唐の軍に対抗できるとでも？
――二百の船団で対抗できるとは思ってはいないさ。だが、比羅夫は、以前、蝦夷に伴っていった兵を、そのまま連れて行くわけではあるまい。粛慎を鎮圧するため、新たに兵を募り、軍旅

に伴うことで、大和の精鋭はさらに厚みを増す。
――……。
――もちろん、それだけで唐と新羅の連合軍に対抗できるわけはない。しかるべく手を打つさ。
――……。
――麗姫（ヨフイ）の言うとおり、比羅夫将軍が水軍を率いて津軽に発ったと知れば、唐と新羅はすぐさま、軍を動かすだろう。だが、彼等の兵力をもってしても、百済全土を完全に制圧できはすまい。私は、すぐにも鬼室福室を百済に戻し、百済の民を説かせ、義勇軍を組織させるつもりだ。百済を占領した唐と新羅の軍は、義勇軍の抵抗に手を焼くはず。なるべく時間を稼いだ上で、私は大和の救援軍とともに百済に上陸し、占領軍を追い払う。どうだ、この筋書きは？
――……そんなことをすれば、犠牲はさらに増えるわ。
――そうだろうね……。だが、やむをえない。私が百済を確実にこの手にし、新たな世界を築くためには。
――……。
――君らしくもない。目的のためには非情に徹するのが、麗姫……いや、鏡郎女（キョウナンニョ）ではないのか。
――そのとおりよ……。でも、あなたの口から、そんな非情な考えを聞きたくはなかった。
――なあ、私が何故、額田郎女をも従軍させようと言ったか、わかるか？
――どういうこと？
――額田郎女が、蝦夷の地で如何に振舞うか、見ておきたかった。さらに、様々な諸勢力が、

互いを疑い監視しあう飛鳥から離れた土地で、じっくりと話を聞きたかったからだ。君が言うとおり、大和を富ませたのが額田郎女だとすれば、私の国づくりの参考にもなる。

――……。

――それに、彼女が飛鳥を離れれば、君は邪魔されることなく、三韓出兵の布石を打つことができるのじゃないか？　私はそこまで考えたのだが……。

分かっていない！

豊璋王子が宿する川原宮を出で、夜道を走りつつ、鏡郎女は、百済の言葉を呟き続けた。

私は、またしても額田郎女と大海人皇子にしてやられたのよ。しかも大王や大官どもの前で！

葛城皇子も、蘇我赤兄も、中臣や巨勢も、もう私の言うことを聞いてはくれない。有馬皇子の一件に続けて、目的を遂げられなかった私を、彼らが信用するものですか。他ならぬあなたの発言が、私の権威を失墜させたのよ。

何故？

誰も彼もが、私の邪魔をする。私が愛した者たちが、私の行く手を阻もうとする……。

「亜那！」

鏡郎女は立ち止り、己が腕を鷲づかみにきつく掴んで身をよじり、暗い虚空に向かって叫んだ。

「よくぞ、かの大海人皇子が鏡郎女の眼をかわして、みごとに謀をなしとげたものよ」

中臣鎌子は、苦しげに貌を歪め、喘ぎつつ呟いた。

難波の邸に、安見娘が忍んできていた。彼女の柔らかな手に、己が股間を弄ばせつつ、朝議の経緯を聞いた鎌子は、珍しく雄弁であった。

「鏡郎女が、大海人皇子と額田郎女を見張らせた土蜘蛛は……」

指でひとつだけ残ったふぐりを軽く圧しつつ、安見娘は言った。

「吾が命により、偽りの報せを鏡郎女に伝えていた」

「なるほど……」

中臣鎌子は、頷いた。

「阿倍の水軍を粛慎を鎮めに津軽へ遣わすとの献策も、汝が考えたのか」

「そこまでは知らぬ。ただ、吾が謀ったのは……」

安見娘の指が、ふぐりをひねった。鎌子はのけぞり、呻いた。

「鏡郎女を、大海人皇子や額田郎女の謀の外に置くことのみ。そして……」

「安見娘よ」

鎌子は貌を歪めつつ、安見娘の髪を撫でて言った。

「汝が土蜘蛛をその手にする日も近いの」

安見娘は微笑み、鎌子の頬に唇を押し当てた。

やがて百済は滅び、大海人皇子らがどう抗おうとも、大和は三韓に出兵する。国も民も大きく動く軍、吾等が政事を掌中に収める機はいくらでも出てこよう……。

安見娘は、総身をわななかせて悶える鎌子の、雄々しく屹立する陽物を唇に含み、ふぐりを圧して苦と快を与え続けた。

その傍らで、生まれたばかりの幼子、不比等という名の男童が、暖衣にくるまれ、安らかに寝息を立てていた。。

宴は果てた。

河辺宮を訪れた蝦夷どもは各々の宿へと還り、舎人も女孺も寝静まったなか、大海人皇子は独り寝所に端座し、額田郎女の使者を待っていた。

汝は動くな。

幾度、そう言われ続けてきたであろう。蘇我鞍作の誅戮、豊日大王の失墜、有馬皇子の謀叛。その都度、汝は動くなと命ぜられ、動かず、動かぬことで、大海人皇子は不思議なものを得た。

人望。

大王家や、蘇我、巨勢、中臣といった大官が争い諍う度に、何も動けず経緯を見守るしかない群小の豪族どもは、同じく動かない大海人皇子に心を寄せてきた。彼等にとって、三韓出兵は、いたずらに宰領する民を兵に差し出すことでしかない。得られる利は大官どもが手にし、彼等のもとに零れ落ちてくるわけでもない。

皇子は不遇に見えた故に、いつしか、不遇な彼等の望みをその背に負い、突き動かされるように、飛鳥に来て初めて動いた。動いて、己が意のままに朝議は定まった。

抑えきれぬこみあげる思いを共にするのは、額田郎女しかない……。

皇子は、息も荒く、窓の月を見上げながら、昨夜の出来事を脳裏に蘇らせていた。

――昨夜。

褥に入ろうとした大海人皇子に寝所に、額田郎女が自ら忍び込んできた。

すぐにも、岡本宮へ。

宮へ？

宝大王が皇子を待っている。

津軽の蝦夷が、粛慎の寇に悩まされていると聞いた大海人皇子は、阿倍比羅夫の水軍を、津軽に向かわせることで三韓出兵をやめさせることはできないか、と額田郎女に伝えていた。返事のないまま半ば諦め、朝議の前夜になって額田郎女は自ら姿を現したのだ。

まず、宝大王を説くべし。宝大王は、三韓出兵が是か非か、明らかにしていない。あるいは、皇子の口からその非を説けば……。

しかし……。大海人皇子は懸念した。鏡郎女配下の土蜘蛛の眼が張り巡らされるなか、どう潜り抜けて岡本宮へ到れと？

手は打った。出来うるかぎり打った。朝議は明日、躊躇っているべきではない。

果たして、手引きした額田郎女が訝るほど、岡本宮の大王の寝所まで、なんの妨げも、見張られている気配すらなかった。それが、安見娘の謀であることを、額田郎女は知らない。

宝大王は、白絹の寝衣を纏い、椅子に座していた。

「大海人皇子か」

懐かしげに名を呼んだ宝大王に、大海人皇子は拝跪し、すぐさま貌を上げた。

「明日の朝議にて奏上したき件あり」

大王は頷き、応えた。

「額田郎女より、おおよそは聞いた」
「では……」
「されど」
微笑を絶やさぬまま、宝大王は身を乗り出し、問うた。
「いま一度、汝より言え」
大海人皇子は戸惑った。宝大王が皇子を見る眼は、二つしかなかった。厳しい猜疑か、燃え上がるような欲情か。
いま、大王の眼差しはいずれでもない。あえて言えば……。
どこかで見た眼差し……。
それを思い出せぬまま、大海人皇子は陳(の)べたてた。
「阿倍比羅夫は、一年(ひととせ)の裡にて、東の蝦夷の多くを服属せしめた。今は、さらに大王のを東に及ぼすべき時である」
「百済が危急存亡であってもか」
「そもそも」
大海人皇子は声を張り上げた。
「百済と新羅の争いは、過(す)ぐること十六年前、百済の義慈(ぎじ)王、大軍を興して百済を侵し、新羅の武烈王が娘の一族を悉く殺戮し、その首を王都に送る。それより、両国の境をしばしば兵が往来し、互いの民を苦しめ、今に到るものなり」
「続けよ」

宝大王は瞼(まぶた)を閉じ、静かに聴き入った。
「大和が、古(いにしえ)えより百済と縁(えにし)を結び来たった事は確か。されど、吾等大王家の一族がとるべきは、まず、大和の民を安らかならしむる策」
「民を……」
宝大王はかすかに瞼を開け、微笑んだ。
「然り。三韓の地を新羅が征すれば、新羅と盟を結ぶも、一つの策」
「皇子は、百済を見捨てよとや？」
「たとえ、吾等が三韓に兵を送るとても、勝てる見込みは如何ほどなりや。新羅の背後には唐があり。もし敗れれば、多くの財(たから)を失い、民を失い、無用の恨みを買い、かえって大和を危うくする恐れあり」
大王は応えなかった。皇子の声は次第にしわがれた。
「また、大和が三韓の地で敗れれば、唐や新羅は必ず蝦夷と盟を結び、東と西より大和を挟撃するはず。そうさせぬために、まず、東の蝦夷との縁を深めるべし」
肩で息をしつつ、皇子は口を噤んだ。誰かに対して、ここまで弁じたのは初めてであった。脇を汗が濡らし、膝の震えを押さえられなかった。
寝所に沈黙が流れた。天井の梁では、額田郎女が気配を消し、なりゆきを見守っていた。
その郎女の眼が潤んでいた。よくぞ陳べたり……。
「大海人皇子よ」
宝大王が静かに口を開いた。

「来(こ)よ」
ひび割れた手を動かし、皇子を招き寄せた。膝を進めた皇子を、大王はさらに手招きした。互いの息がかかるばかりに招きよせ、不意に、腕を伸ばして皇子の頭（こうべ）を抱き寄せた。
皇子の貌が、大王の胸に押し付けられた。かつて、ふくよかな膨らみを見せた胸乳は萎（しお）れ、あばら骨が浮き上がっている。しかし、かつて河辺宮でまぐわった折には覚えなかった、暖かさのようなものが伝わってきた。
この暖かさは……かつて伊勢で……。
稗田阿礼(ひえだのあれ)の姿が、皇子の脳裏に蘇った。
「吾は……」
大王の頬を涙がつたい、皇子の額を濡らした。
「汝が子を産みたかった」
大王はすぐに身を起こし、「明日の朝議にて、その策を奏上せよ」と言い放ち、去れ、と手で合図した。大海人皇子は急ぎ四肢を正して拝礼した。
再び額田郎女と肩を並べ、皇子は夜道を河辺宮へと向かった。

その夜、額田郎女も、その使者も、河辺宮には姿を見せず。大海人皇子は眠りに落ちた。
やがて冬となり、年が明け、阿倍比羅夫を大将軍とする百五十の船団が、難波の津(つ)を発した。